

先日、インド西部へ旅に出かけた。目玉はデカン高原に点在する仏教石窟寺院である。事前に文献調査をしていると、気になる存在にいきあたつた。それは「諸難救済の観音菩薩像」である。

この観音像は5～7世紀頃に造営された各地の石窟にみられる。正面向きの観音立像で、日本の女性的なイメージとは異なり、上半身に着衣がなく、髪を結つて頭上で丸く束ねる苦行者の姿である。左手に蓮華の茎をとり、右手に施無畏印をむすんでいる。

特徴的なのは観音像の両側に、危難に遭遇している人々が救いを求める場面が左右四つずつ、計八場面（火難・剣難・枷鎖難・海難・獅子難・蛇難・象難・羅刹難）彫り込まれていることだ。一般的な『観音経』七難よりも悪獸による難が具体的で詳しく、象難を描くのはいかにもインドらしい。鬼女の島に漂着しないように海難の無事を願うのも、どこかコミカルだが、石窟寺院のパトロンでもあった貿易商たちの切実なあり様が反映されたものだろう。

この観音像の造形は、美術史としては地域的・時代的にほぼ孤立した表現で、中国や日本にはまったく伝わっていないという。

インドでの旅程はなかなかタイトだった。乾季の涼しい季節だったが、照りつける日差しはなお強い。石窟の中に入るとひんやり心地よく、時おり静寂も感じられる。図像の実際のサイズ感や位置関

## 工藤量導



アウランガーバード石窟の観音像

うつむく者にも光あれ よれよれの道を 照らすように  
うつむく者にも 風よ吹け よれよれの頬涙 弾くように

（小谷美紗子 「universe」 より）

OP 微風  
事か

微

風

吹

動

係、光の陰影の具合を五感でもつて学ぶことができた。

そして、いよいよ件の観音像にお目見え。とくにアーランガーバード石窟の観音像は優美な傑品で、危難場面も大きく、細やかに彫刻がなされている。よく見ると、すべての場面ごとに脚を後ろに蹴り上げて救済のため飛来する小さな観音の化身の姿がある。

観音菩薩はその威神力ではるか遠くを見渡し、困っている人の声に耳をそばだて、心を通わせて不安な気持ちを取り除いてくれる。苦の現場へと飛び出さずにいられない性なのだろう。私たちがよりになりながらうつむき進む道筋をほのかに照らし、同じようにこれまで歩調を合わせて、上を向いて踏み出せるまで寄り添い、耐え忍んでくれる。庶民に愛され頼りになる存在なのだ。

さて、石窟内の意外な驚きが、艶やかな肢体をもつ女性形の像が多いことだった。エローラ石窟に顯著だが、まさか僧院窟にこんなにたくさん祀られているとは…。帰国してから調べてみたら、あれはターラーという仏教の女神らしい。実はインドでもっとも人気が高い女尊像で、釈迦像、観音像に次ぐ作例数をほこる。

後代の密教經典には観音の瞳より放たれた光からターラーが出現したと説かれ、チベットやネパールの伝承では、人々を救い切れない観音が失意のうちに瞳から流した涙の池の中にターラーが生まれ、

観音を励まし助けたというおとぎ話のようなエピソードもある。「ターラー」の語に「瞳」の意味があるらしく何とも興味深い。

8世紀以降、救済図像の主役は観音からターラーへと変移し、「ターラー菩薩八難救済図」としてインド、チベット、ネパール、東南アジアで絶大な人気を博した。チベットでは観音とターラーがカップル的な存在としてとらえられていたという。ちなみにエローラ石窟には観音が主尊、ターラーが脇侍の三尊像も存する。

将来的に、文字通り八面六臂の活躍をとげることになる観音菩薩だが、生きとし生けるすべての者を慈悲の眼でもつて觀るというのは、想像できないくらいの大仕事だ。観音の涙からターラーが生まれたというのも人々がその辛苦を慮つての説に違いない。

とはいって、観音菩薩は衆生救済のために大願を立て、次の世で仏になることが確定した、表立つて弱さを見せられない孤高の存在だ。決して苦しさの末にくじけて泣いたのではないだろう。

乾季の砂ぼこり舞うインドで、まばたきをする暇もなくよれよれになりながら、それでも人々の苦難の現実から眼をそむけず眞実を見つめ続けた観音菩薩の乾いた瞳。お節介な微風は、思わずうつむきこぼれた不意の涙を吹き弾き、ついぞその頬を濡らすことはなかつたのではないか。そう願い詫したい。

